

第三部 由来・思い出の部

「円福寺」

焼きうちから免れた話

円福寺は、今からおおよそ六百年程前の一三九四年、応永元年に開山されたお寺ですが、久意上人によって創立されました。

御本尊の阿弥陀像も当時のものといわれていますので、歴史ある仏像で、その時々の人々によって崇め敬われ、信仰されてきました。

現在の本堂は七年前（一九八〇年）に改築されましたが、改築前の本堂は明治維新の折りの廃仏忌の時、焼きうちから免れたものです。

時の住職第二十八代関代上人は、方々の寺が次々に焼かれていくのをご覧になり、庶民の信仰の中心である寺が失われていくのを嘆かれ、これに断固として反対され、円福寺にも押し寄せた討手を撃退されたというのです。いよいよ討手が門前に迫ったとき、上人は円福寺の門前

に大きく立ちはだかれて、

「寺を焼くのであれば、自分を焼いてくれ」

と、大音声に叫ばれた。討手の者はこれに恐れをなし、止むなく当時本堂に掲げてあった十六羅漢の見事な彫り物の欄間をはずして、焼き払い、そのまま立ち去ったということです。

そこで、第二十八代住職は、永久にこの寺が栄えるようにと、死後は山門の脇にお墓を建てられ、地藏尊となり、こうした諸々の災いからお寺をお守りになっており、現在もお祀りされています。



この話は、大正十年頃、先の住職夫妻が当時の年寄りから聞いた話として残っています。

昭和六十二年五月吉日

水徳山満月院円福寺

第三十四代住職

多賀 学英



地名「けど」の話

上永谷 松岡 政栄

今から六十年前程前（大正時代から昭和の初め頃）の話です。

上永谷の西二キロメートルほどの所、新富町追分の東に、当時としては田舎では珍しい大きな広い道路跡がありました。

村の古老達の話によると、この道路跡は昔の街道跡の一部で、ここには長い一本道の街道があったということです。その昔、この街道を殿様の行列が幾組も通過して行ったということで、この街道を通り抜けると水谷原坂を下り、高鍋の町中を通過して小丸川を渡り、坂本坂をのぼって川南の松並木街道を北上し、江戸に向かったのです。だから当時の参勤交代では、なくてはならない大事な街道だったようです。

その頃から土地の人々は、この街道のことを訛って「けど」と呼ぶようになりました。

現在は、農地開発等で街道跡をみることはできません

が、所々にその面影を残しているところもあります。しかし、土地改良事業等で永くは残らないものと思います。但し、土地名だけは「けど」と永久に残るのではないかとおもいます。

高鍋豆腐の由来

高鍋郷土教育資料集より

神奈川県藤沢に、藤沢寺というお寺がありました。そのお寺の住職は隠居の身になりますと、全国を行脚し、更に修業を重ねるしきたりになっていましたが、この僧



侶の方々を遊行上人と呼んでいました。ある年のことです。上人様が高鍋藩にお出でになることになりました。高鍋の人々は尊い方がお出でいただくというので心待ちしていました。いよいよ当日になりましたが、藩ではお旅所をお仮屋（今の役場の所）と定めて、お迎えしました。

さて、いよいよ夕餉をむかえてその食膳に豆腐も出されていました。上人は早速で馳走になりましたが、食べ終わられますと、

「心のこもったご馳走、大変おいしく戴きました。有難う、有難う」

と、礼を述べられた後

「私はこれまで諸々方々で豆腐を食べたが、どこもおいしくなかった。それに比べ高鍋の豆腐はたいへんおいしく、江戸のものと全く変りない。実に久々においしい豆腐をたべた。高鍋の豆腐はまさに関西一だ」

とおよろこびになり、ほめられたのでした。

ところがその筈です。高鍋豆腐には、次のようないわれがあるのです。

時は元禄の頃（およそ二百年前）新小路の人で、山田重潔氏の何代か前の祖先にあたる方が、

「関西の豆腐は、どうもまずくていけない。江戸の豆腐のような豆腐はできないものか」

と考えておられましたが、折しもその方がお殿様のお供で、江戸にいかれるようになりました。それから幾月かの後に江戸に倒着されたその方は、早速、かねてより知り合いの豆腐屋を訪ねられ、豆腐づくりの秘伝を授けてもらわれました。

その後、その方は、高鍋に帰られると直ちに豆腐づくりを伝授されたといえます。それ以来、高鍋の豆腐は、江戸の豆腐に勝るとも劣らない、うまい豆腐が出来るようになったということです。

鯨橋のいわれ

蚊口 日高勝次郎 七十七歳

宮田川の流れは、ずっと昔から海岸まで一直線に日向灘へ打ち出す流れと、北の方へ蚊口の街中を流れて、小丸川へ注ぐ流れがありました。

しかし、大正時代の終わり頃までは、現在の様相とは全く違っていたのです。水量が多く、深さも相当に深く、大きな千石船が自由にいききしていた程です。その数も大変多く、漁船等を交えて大層賑わっていました。ですから、宮田川の川口付近は港になっていましたし、その付近のことを古湊と呼んでいましたが、現在でもその呼名が残っており、古湊と呼んでいる人がいます。

中でも公民館の下付近は「向上奄」といって、川幅も広く深さも十米近くもあり、水面は青々と不気味に光っていました。また、少し海が荒れると海水が川口からどっと流れ込み、辺り一帯は小丸川まで海水が満ちあふれ、満ち潮の時など海同様のありさまでした。

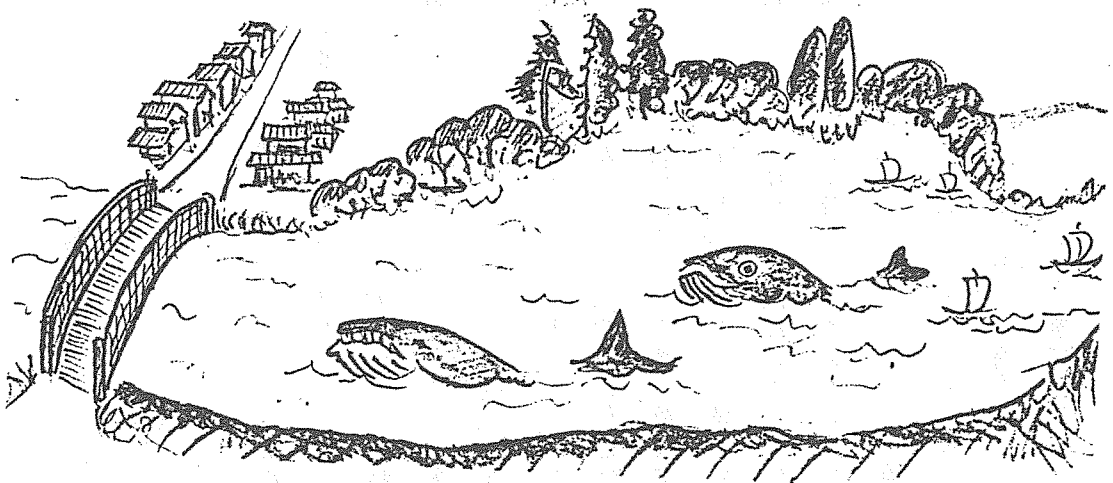
こういう状態でしたから、海の魚などが潮にのって沢

山入ってきましたし、とくに尾鰭が水平になっている「三千ぼ」（いるかのこ）という、体長が二間半（約五米）程もある魚が群れをなして泳いでいました。五、六匹から多い時は十数匹の群れが、ゆうゆうと回遊している様は本当に見事なものでした。中には大きく飛び跳ねたり、白波をけたてて暴れ回るものもありましたが、こんなことはしよつ中見られました。

土地の人々はこの勇ましい元気のよい魚のことを「鯨」とも呼んでいたのです。それで、この川にかけられた橋を「鯨橋」と言う様になったようです。

しかし、当時の鯨橋は今はなく、寂しい思いがしますが、現在のコンクリート橋（蚊口橋）の前にかけてられていた木橋を「鯨橋」と呼んで、昔に思いを馳せていましたし、現在も、この蚊口橋を「鯨橋」と呼んでいます。

本当の「鯨橋」は、今の橋から小丸川の方へ五十米程下流にかけられていました。当時は、今の



駅通りの道路はなかったのです。南九州化学工場入口付近の所から南東の方向へ二、三米巾の道を通じ、川端に出て蚊口橋のたもとを通過して、落合英夫さん宅前から宮田川をまたぎ、後は海岸まで一直線の道が通っていました。その宮田川をまたいだ橋が、「鯨橋」だったのです。

川田の寺の物語

川田 山下 重秋

昔、川田にはお寺がありました。が、百年余り前になくなってしまっています。しかし今でも、当時のお坊さん達のお墓や、古井戸、そのほか遺品の数々が、当時の面影を止どめており、その昔がしのばれて侘しい気がいたします。

お寺のあった場所は、川田神社の一の鳥居をくぐり、参道を西に進み二の鳥居から南の方へ小道が通っていますが、この小道の西側（現在、竹原祐信さんと祐芳さん兄弟の屋敷になっています）五十アール余りの土地が、昔のお寺の境内になっておりました。

お寺のはじまりは、遠く鎌倉時代までさかのぼります。西暦千三百年頃、正安年間に大輔・教月という二人の山伏が開いた修験僧の寺で、六百年余り昔のことです。

このお寺は明治のはじめまで、およそ五百年ほど続きました。住職も初代の大輔・教月に始まって二十四代をかぞえていました。ここにご住職の方々のお名を掲げま

して、ご供養といたします。

初代：大輔・教月 二代：明鑲 三代：長慶

四代：長家 五代：祐鑲 六代：密導 七代：

聖舜 八代：秀範 九代：乗範 十代：空舜

十一代：○舜 十二代：○儀 十三代：勢増 十

四代：勢意 十五代：宝珠院 十六代：勢称

十七代：正寿院 十八代：成就院 十九代：源祐

二十代：源久 二一代：正寿院 二二代：玉泉院

二三代：最勝院 二四代：良慶院

このように鎌倉時代から江戸時代まで続いた、歴史のあるお寺でしたが、明治になりますと間もなく、仏教廃止運動（廃仏毀釈）が起こり、高鍋でもその影響を受けて、当時、高鍋藩明倫堂で国学を講じておられた名和大年が中心となり、橋口年家・原田年実・飯田清年等がその部下となって、川田寺住職良慶院もこれに加わって、盛んに寺の取り壊し、焼き払いをおこないました。川田の寺も例外ではなくその難に合い、明治三年、遂に廃寺となってしまいました。

そこで良慶院は還俗して、名を橋口年実と改めて川田

神社の神官になりました。

……川田神社……

この神社は、川田寺十二代住職「○儀」が永禄五年（一五六二年・將軍足利義輝の頃）速秋津日古神を寺の氏神として祀ったのが始まりで、その後天正十五年に竹原忠左衛門が、熊野三神を合祀しました。元禄十六年には、城主秋月種政公が参拝して、神領七石五斗を寄進しています。

川田神社は、川田寺の氏神として建立されましたが、明治以降は独立の神社となりました。永禄五年から今日まで四百二十余年の歴史があり、現在は常緑の大本に囲まれて、静かなたたずまいとなっております。常に清掃されて美しく、村人達の集いの場、憩いの場所として、にぎわいを見せています。

（この稿は、故大泉篤範先生が諸資料にもとづいて纏められたものを参考にして書いたものです。）

鳴野での思い出

宮越 杉尾久次郎

鳴野地区は伝承芸能として有名な棒踊りで知られている。この鳴野には私達が子供の頃、幾千年を生き続けてきた松の老木が、水神様の境内にご神木として地区住民から親しまれてきた。幹の回り八米ほどで、大きな枝は四方にのび、その下はうす暗い程だった。境内は子ども達が遊びたわむれていた。しかし、あの松の大本は戦後の凄惨な台風に合い、その雄姿は現在見る事ができない。鳴野地区住民のシンボルでもあったのにと思うとき、まことに残念でならない。

鳴野の浜には地引き網があった。地区住民から希望者をつのり、出資制で網子の組織で運営されていた。地引き網は地区住民のレクリエーションであり、又、利益もあった。朝暗いうちから船出の呼び声が聞こえたことを思い出す。船の上には網を小山のように積みこみ、沖に向かって漕ぎ出す。その光景はまことに勇ましいもので、若者達のいせいのよいかけ声は、広い海辺いっぱい響

きわたった。

学校の夏休み頃であったと思う。海から網を巻きあげる道具にカグラサンがあった。網を海中から完全に巻きあげるまで、カグラサンには網子が群がって押して回った。本当になつかしい思いがする。

鳴野から中学校、女学校（現在の高校）に進学する生徒や、町に用たしに出かける人達の交通機関として渡し船があった。渡し場があったのは高鍋大橋の下流百米くらい の地点で、稲荷の渡しと呼んでいた。又、汽車を利用する人達は鉄橋を渡っていたようだ。

高鍋は児湯郡の中央に位置する関係で、毎年秋になると子馬のせり市が、小丸川河川敷（小丸大橋西のたもと付近）で約一か月もの間続いた。期間中は、サーカス・陶器・金物・傘・衣類の出店がたちならび、中でも人気のあつまるのはバナナの叩き売りであった。

私の子供時代を思うとき、先ず人と人との親睦の高揚であったと思う。農作業や屋根のふきかえなどの作業には、村中の人が出役して助け合い、その指図や音頭は地域の古老があたり、全員が一致協力していた。農作業も

時代の移り変わりとともに機械化されたが、昔の田植え作業など、たんぼの中に何十人もの老若男女が並んで汗を流していた。そうした相互扶助の中から人間味豊かな人間性が育ってきたと思う。

年寄りの体験談などを聞く窓口が少なくなりつつある昨今をさびしく思う。自分自身から、若い世代の人達と接する機会を持ち、忘れ勝ちな郷土の思い出を語りたいと思います。

高鍋のウクライナ

青木 酒井 暁 八十三歳

「年寄りの 末だ忘れぬ一言を

君に託して 忘るる前に」

（小春日和の暖かい日、この詩を付して、標題の寄稿をいただきました。）

昭和十八年の末頃のことである。当時の高鍋町長、横山政行氏が「青木地区は高鍋のウクライナである」といわれた。

その頃、ソビエトのウクライナ地方はヨーロッパの穀倉地帯といわれていたが、それで農産物のよくとれる所をウクライナと唱えていた

これは、町役場において町内全実行組合長会が開かれた折のことであるが、上青木組合長・久保田久男（故人）と下青木組合長の私とは、横山町長に発言の趣旨と、取り消しを求めたことがあった。

当時は戦争の最中で、米の供出を強制された頃で、供



出量が増加することを心配したからである。

そもそも、青木地区は昭和の初め頃より稲作に熱心な森重行（故人）が青年を指導し、当時、上江村農会技手および児湯郡農会技師等呼んで講習会を開いたり、地区の幹部と計り、宮崎県赤江農事試験場へ青年一同、自転車ペダルをこいで視察に行き、又、試験場より技師を招き実地指導も受けた。小さな地区でこの様な研修を試みるころはほかにはなかった。

森重行は自分の田で研究田を作り、指導講習会を開くなど稲作に熱心にとりくみ、後に農林大臣賞を受けた。研究会では水田の酸化防止・害虫駆除、特に「ツマクロヨコバイ」「二化メイチュウ」「白葉枯病」の駆除の研究にとりくみ、駆除に当たった。

戦時中、供出米は公平に行うため一枚一枚稲田を調査して、その収量を数名の委員によって決定されたが、その時隣合った田でも、青木の人の田と他地区の人の田とは、青木の人の田の方が二割位の増収が見込まれた程であった。畑作でも陸稲、甘藷を広く耕作したし、千切大根も高鍋では最初に導入し広く耕作したが、当時千

切り大根も代用食品として貴重な食糧であった。南瓜も水稲が晩作であったため、その前作として耕作され南瓜列車が走ったが、南瓜も代用食品として貴重な作物だった。

又、昔から養蚕も盛んで、「青木の繭は県下一」と、製糸会社に取り引きされた。

横山町長のいわれた「青木は高鍋のウクライナ」は、青木住民の誇りでもあったのである。

青木は高鍋のウクライナは一朝一夕にできたのではない。先輩の方々のたゆみない努力の賜ものであり、無形の遺産であることを忘れてはならない。

上江小学校

(高鍋西小学校)の思い出

東平原 福永ミサオ 七十八歳

現在の高鍋西小学校を、上江尋常高等小学校といいました。大正時代の頃のことです。

校舎は、東西に長い木造、瓦葺きの校舎が二棟あり、教室の出入口は腰高の障子戸、窓も障子で、外がわは雨戸をしめるようになってありました。運動場は校舎の北東にありましたが、現在プールがあるところ付近には畑があり、野菜をつくっていました。又、校舎の南東の方に、奉安殿といって、天皇・皇后両陛下のお写真を納める建物がありました。

上江小学校には分教場が二つあって、市の山分教場(二年まで)と持田分教場(四年まで)が設けられていました。本校には六年生までの小学校と、小学校を卒業して上級の勉強をする希望の者のために、高等科(二年間)が設けられていましたし、更に勉強したい者は、中等教育(当時は農学校・中学校・女学校)を自由に受けたも



のでした。

学校に通う服装は、和服（着物）わら草履でしたが、五年生以上の生徒は袴を着けることになっていました。

朝礼は毎朝ありましたが、夏は強い陽射しに照りつけられて、気をつけの姿勢で動けば叱られるし、きついのをじっと我慢しました。冬は冬で寒さのために素足が痛く、手がかじかんでのばさねばならない指ものびず、叱られたこともずいぶんありました。その当時はほんとうにきびしい教育が行われたものです。特に五年生以上になると、男子は小さい「かばん」を背に負い、小銃をもって軍事教練、女子は裁縫教室で裁縫、礼儀作法等女らしく、又、家庭に入っての実用的な事ばかりで花嫁学校ともいう様な教育でした。

作業は五年生以上で、男女共に野菜作りです。小さい「肥たんご」をかついで肥（こえ）をしたものです。稲の苗田の虫とりにもよく出かけましたし、田植え、稲刈りなどにもよく出かけましたが、汗まみれになって働き、おなかをすかしている時に出されたおにぎりのおいしさ、楽しい一時も忘れられません。

工作は竹細工・草履作りなどでした。小刀で手を切ったりしてだんだん上手になっていったものです。

最後に祝祭日のことですが、前日になると教室をしきってあった大きな板戸をはずし、教室を三つか四つ程合わせた会場をつくるのです。そして、天皇・皇后のお写真をおまつりして、厳かに式が行われたのです。当日の朝、式が始まる前に奉安殿よりお写真を式場にうつされる時、校長先生と首席の先生がマスクをかけられ、白手袋されて、うやうやしくかかげて通られると、私達は姿勢を正し最敬礼して通過を待ったものでした。

もう一つ、お正月に新年の式終了後、三々五々各自自作の名刺を持って先生方のお家を一軒、一軒、名刺を置いてまわったことは、ほんとに楽しい思い出の一つです。

荷馬車とわらべ

元御屋敷 杉田 貢 六十四歳

「ヨイ、おまやどこかえ」

と後の方で誰かの声がするので、ヒョイと振り返ると、子どもの自分は、不精髭が顔中覆い、顔というより髭といったほうがよい大男がいて一瞬ギョツとした。

「うん、御屋敷ばい」

と、答えると

「あ、そか、ほんならお稲荷さんのあるところじゃね」

やっと納得したようにその男は立ち去っていった。

子ども心に、その頃の四十歳前後は現代の六十歳から七十歳の年齢に判断されたが、自分が最早その年齢になっており、今の子どもたちが自分を見てどう考えているのかと思うと、思わずひとりたりと笑みがこぼれる。

高鍋中学校（現高校）裏門から東へ、幅二米の道が一本通っていたが（現在その一部は残っている）当時は道といっても車力（人力の荷車）馬車等の通行ができれば十分で、歩行者優先ののどかな田舎道であった。

ところが、馬車（貨物用）は我々庶民の家庭の子どもには珍重な乗物だった。しかし、町場、交通量の多い場所等ではその頃の巡査（警官）さんから、車に子どもを乗せていると注意を受け叱られるので、町場が近付くと「も、降り、巡査どんにおごらるっど。また、乗するかいね」

と降してくれる、やさしい小父さんだった。

しかし、車力とか馬車とかいっても車軸と車体は直結しており、クッションなどある筈がない。車輪にしても輪金（わっか）の字のように鉄製の輪がはめられ、スポークの部分は堅木で放射状に組まれた代物であるが、当時は時代の先端をゆく文明の利器であった。

ある日のことである。所用で町へ出向いた馬車の小父さんに、弟と二人で

「小父さん、どこにいきやるのよ。馬車にのしやい」

と声をかけると、心優しい小父さんはすぐに馬車を止めて、

「おまえどみゃ、きよで（兄弟）でどこに行くかえ」

私どもはとっさに答えた。

私どもはとっさに答えた。

「うん、弟と二人で、しょぶいけまじ」

別に用があるはずもない、夏の暑い盛りの午後である。すると、小父さんはいった。

「おー、いど（いいよ）はよ乗れ。しっけ（しっかり）で（馬車の車体）を握っちよれよ。危ねど」

と、いわれて馬車に飛び乗ると、小父さんは再び馬に鞭を当てる。馬車は凹凸の砂利道をガタガタと大きな音をたてながら進み始める。ところが、馬車の振動はもろに五体に響きわたり、五体の骨がバラバラになる程である。頬の肉はブルブルと震え、手でも離そうものなら転げ落ちそうになる。脳髓まで感じる振動は、食い縛った歯茎もガクガク音がするが、それでも降りようとしなない。そして我々兄弟は、馬車にのったという優越感が一杯で、大満足であった。

やがて目的地に着くと小父さんは、大きな声で、

「お前どみゃ、着いたど、はよ降り、又乗するかいね」
細い眼の奥は笑っていた。

「小父さん、おきん（有難う）、又乗しゃいいよの」

と、真面目くさっていた。

ご苦労なことである。私たち兄弟は、元来た道をスタスタと我家へ向かった。途中、あちこちと道草しながら家路をたどるのだったが、日はすでに西に傾き、夕焼けが空を真赤にそめていた。



稲荷さんと小丸川の思い出

元御屋敷 杉田 貢 六十四歳

御屋敷の小丸川べりに建立されている稲荷神社、古い昔から士民の尊崇が厚く、祭礼には大変な賑わいをみせていたという。この社の境内に立つ老松は十数本だったと記憶している。その老木の回りを計るのに、村の童が四名いや五名程で取り囲んだものだ。樹高は子ども時代の推定で三十米、いや四十米、あるいはそれ以上と思えた。仰ぐ梢の部分は枯れつきで幹だけが残し、鳥または鷹の類であるうか、老松の先端に度々憩い、その偉容はまことに壮観だった。

道ぞいに建てられたコンクリートの大鳥居は、その昔は木製で朱塗りのものだった。その大鳥居から社殿の間にやはり朱塗りの小鳥居が二十数基奉納されて、



行儀よく並べて建てられていた。また、どこの神社も同じと思われるが、鳥居をくぐって神殿までは若干の広場があり、左手に手洗いが備えられ、その脇には三番醤油

で煮しめた程黒くなった手拭があり、奉納という文字のみが判読できた。

そんなある日、村の衆が知合いと会話を交わしていた。

「どこに、お出でなんしたのよ」

「うん、稲荷さ（稲荷様）に、めち（参って）来やんした。なご（ながく）めっちゃらん（参っていない）かったかり、久し振りにめちきやんした」

お国訛りは響きがいもので、こんな言葉をよく耳にしたものだ。

拝殿の左右には、当時、宮

大工の傑作と思える彫り物が牙をむきだして凝視していたし、天井から下は奉納された絵馬でぎっしりつまっていた。子ども心にその絵馬には目を見張り、種々の色彩が豊かで、一瞬見止どまったものである。

拝殿の床は高く、したがって床下は小さい子どもは直立のまま十分歩ける程だった。幼い頃、希に物乞いのおじさんが、この床下を勝手に仮住いとしていたが、急にその人が床下から現われるとびっくりして、あわてて駆け出したものである。

祭礼は旧暦の二月の初午と、秋にも一回あったと思う。当時は娯楽も少なかったので、この村祭りは村人にとっては最大の楽しみであった。三々五々と社に集まって来ると、神職は鬼面・猿面等を被り、古びた笛や太鼓を打ち鳴らして神楽が奉納された。そして村中の人々は「おはらい」をうけ、後は大人たちの酒盛りがおそくまで続いたのだった。

稲荷神社から小丸川に降りた所は河川敷である。尾鈴山系に源を発した清流で、私たちの揺籃の地でもある。鮎・鮒・鯉・はぜ・海老等、無限に近い程多く、清流に

群れていたものであり、当時が夢のように思えてならない。子どもの頃、よく母に

「今晚の飯のせ（ご飯のおかず）は、何かいお（魚）をとって来ちよけ」

と、いわれたものだった。それだけ沢山魚がいたのである。

春は白魚取りで賑わい、夏は「のぼりこ」と呼ばれる「はぜ」の稚魚の小魚、秋は「つがに」または「山太郎がに」と呼ばれた蟹取りなど、四季折々の行事・自然に戯れたことは、現在の子どもの様に勉強に追われる、せちがらい世代と違い、のびのびと意のままに成長してきたのである。

大正時代の思い出

菖蒲池 矢野 文代 七十三歳

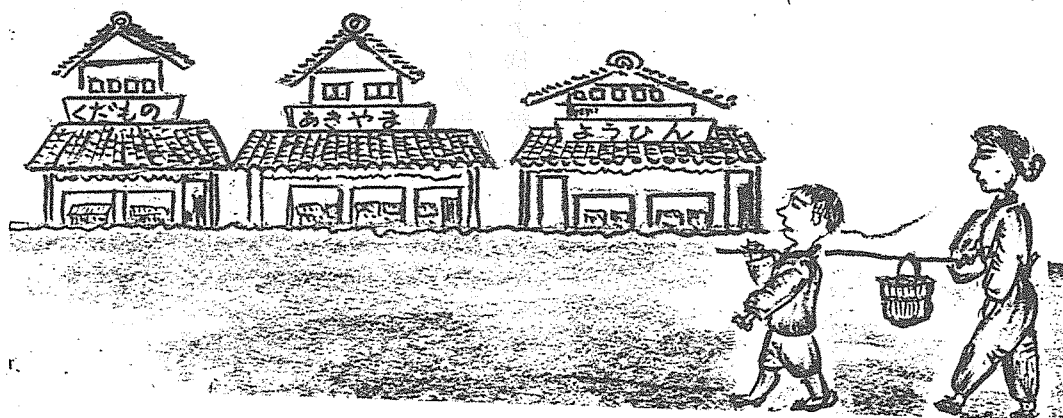
私の家族は父母と私の三人暮らしでした。家は小さな商いをしていたので、よく使い走りにやらされていたものです。昔の子どもは親から仕事をいつかると、絶対にやらねばならなかったのです。

そんなことなので母はいつも私を相棒にして、筏の荻原醤油醸造元（町図書館の向かいがわ）まで、三升樽を棒に吊して二人でかつぎ、醤油買いにいくのです。しかもそれはいつも夜なのです。母のめあては、三升樽で二升の醤油を買うと、きまってわざわざ買いにきてくれたというので、その奥さんは五合柄杓一杯はおまけに入れてくれるのです。その様な些細なことが楽しみな母のために、つらいながらも相棒を勤めたのです。

しかし、私にも小さな楽しみがありました。帰りには必ず秋山商店によるのです。食料品を売る店でしたが、母はその小母さんと知り合いで、いろいろと品物を買っていました。その合間に私は一休みしながら「スルメ

イカ」を店の火鉢で焼いてもらって食べたり、その子どもとおしゃべりして遊ぶのです。

その頃の高鍋の街は役場が下町（今の則信商店）にあり、郵便局も下町にありましたしそのほかお店も沢山ありましたので、下町は大変にぎわっていました。現在の宮銀の所は田中石屋で、続いて津久見屋が並び石屋の西角には尾鈴亭があつて、三階建ての大きな料理店でした。又、北側の角は坂本旅館、そして東側が泉屋でした。鬼塚書店の前身は千手書店といってい



たし、タカシマヤがまだ手塚呉服店といって広い畳敷きの店でしたが、よく母に連れられていったものです。その頃の街（今の一番街）は呉服店（着物の布地を売る店）が何軒もあって、その店の名も今だに記憶に新しく残っています。店は今でこそ近代的な店構えですが、その頃は畳敷きの店が多く懐しく思われます。現在の蛇の目ミシンの所はベッコーヤ（乾物屋）といって大きな食料品店でした。そのすぐ東隣には大福座という芝居小屋がありました。

芝居好きの母はよく隣の小母さんと、昼間打ち合わせでは、夜になると芝居見物にでかけました。芝居のある日は、夕方になるとパーン、パンパン、パーン、パーンと花火が打ち上げられ、櫓太鼓がトントコ、トントコ、トントントンと打ち鳴らされました。

父は母と違って芝居が大嫌いだったためか、留守番している私に向かってよく言いました。

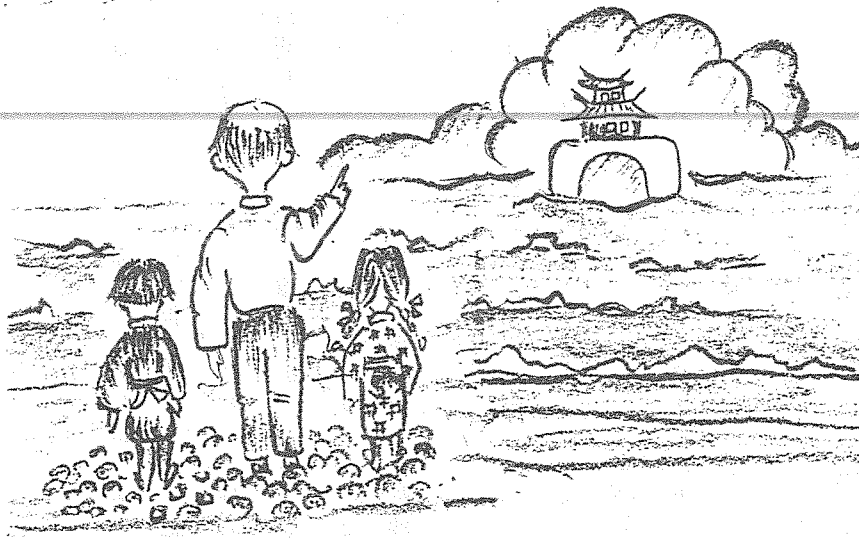
「あの花火と太鼓の音は、何というて鳴っちゃうのか知っちゃうか。花火はバカバカバカコイコイというちよるし、太鼓は、馬鹿こい、馬鹿こい、銭がなけりゃ借

ってこい、といって鳴っちゃうとど」といって聞かせてくれました。

龍宮城のおじいさん

蚊口

三浦 千賀



終戦後は家

ごとに砂浜に
じんどって塩
を炊いた。そ
の時、私の家
では薪を割っ
てくれる人が
いないので、
いなかの伯父
に話したら、
「永い間山ご
もりしていた
きこりが堀割
にいたが、へ
んくつ者だか
ら来てくれる

かな」

と言ったので、さっそく堀割坂の上の家にいったの
んでみた。おじいさんはしばらく考えていたが、

「よし、行ってあげよう」

といったので、たのんで帰った。こわい顔のおじいさ
んだった。

あくる朝早く、向こうの道からおじいさんが来た。大
きなかごに色々道具を入れて背負い、変な帽子をかぶり、
足な草履をはき杖をついて、長いあごに歯のない口を
もぐもぐさせ、いつか紙芝居で見た魔法使いのおじさん
みたいだった。きれいに掃いてある土間にぞうりをぬい
で入って来た。妹は「あんなおじいさんが薪をよう割る
じゃるか」と見ていたが、薪を割る時はびっくりするほ
ど力が強く、とても上手にばんばんと割っていた。

毎日のお弁当の中には梅ぼしが一つ入っていた。私た
ちが、かわいそうなのでやわらかく煮たおかずをあげる
と、涙を流して喜ばれた。日暮れ時になると拝むように
ていねいにおじぎをして、遠い坂道を帰っていった。

ある日、お茶時におじいさんは浜べに立って、遠い海